

『研究紀要元離宮二条城 第5号』の発行

世界遺産・二条城では、1603年の徳川家康による築城から現代に至る、「元離宮二条城」を中心とした京都の歴史・文化に関する調査・研究を進めています。また、その成果と文化財に関する記録の発信のため、研究紀要を発行しています。

この度、第14代徳川家茂が使った江戸城と二条城の庭、二条城を拠点とした二条在番の大番頭が、8月1日に御所へ馬と太刀を献上した儀式の記録などを取り上げた第5号を刊行します。

【主な内容】

◆二条城の御蔵に関する仕事

元離宮二条城には、台所北側の長屋門両側と本丸の西側に御蔵があります。江戸時代、ここには幕府の米が納められていました。京都府立京都学・歴彩館蔵「仮御役中日記（かりおんやくちゅうにつき）」は、享保16年（1731）に米蔵の管理を担った旗本・松崎権三郎の勤番日記です。米蔵に関わる業務や蔵の構造、また禁裏御所の公開の様子なども記録されており、江戸時代中期における二条城や京都の様子を知る上で貴重なこの史料を、全文翻刻のうえ解説します。

◆将軍が使った江戸城と二条城の庭

第14代将軍・徳川家茂の小姓頭取衆を勤めた野村勘三郎は、家茂の日常生活を「昭徳公事蹟」に書き残しました。同書には、家茂が江戸城の本丸・西丸・吹上御庭・二条城などの庭を、公事裁許・軍事訓練・乗馬・大名の歓待などに使ったことが記されています。浜御庭では、釣りもしました。将軍による庭利用の実態を解明します。

◆晩年の第14代将軍・徳川家茂と二条城

幕末、欧米の列強が軍艦で日本に押し寄せ、通商を迫りました。幕府は、天皇の許しを得ず、アメリカなどと不平等な条約を結びます。結果、幕府と朝廷とは不和となり、尊王攘夷運動が高まりました。世情の混乱を収めるため、徳川家茂は、229年ぶりに上洛します。家茂は、二条城に3度滞留し、公武合体をはじめ鎖港、長州征討のために奔走しました。「昭徳公事蹟」の翻刻を通じて、21歳の若さで亡くなった若き将軍の活躍を紹介します。

◆八朔の儀式を通じた二条城と御所の関係

寛永3年（1626）の後水尾天皇による二条城行幸の後から幕末までの間、二条城は将軍の直轄軍である大番組から派遣される「二条在番」の拠点でした。毎年8月1日（八朔）、二条在番を率いる大番頭が使者となり、幕府と禁裏の贈答として将軍から馬と刀が献上されました。はるばる江戸から名馬を運び催されたこの八朔進献の検討を通じ、将軍の京都不在の間における二条城と御所とのつながりの一端を明らかにします。

◆二の丸御殿の廊下の障壁画制作に関する記録

現在、二の丸御殿の廊下にある障壁画は、皇室の離宮として、宮内省が管理していた時代に作られました。これらは京都画壇の画家たちが描いたものです。その意匠には、正倉院宝物などを参照して制作され、戦時に焼失した皇居の障壁画との共通点が見られます。宮内省内匠寮の『工事録』に載る、明治31年から33年まで（1898-1900）の関連文書を翻刻し、障壁画制作の時期と範囲、制作者や意匠決定の経緯等、その実像に迫ります。

【規格】

A4判、白黒・一部カラー、240頁（非売品）

【配架先】

国立国会図書館

京都府立図書館、京都府立京都学・歴彩館

京都市立図書館

文化庁、京都府教育庁

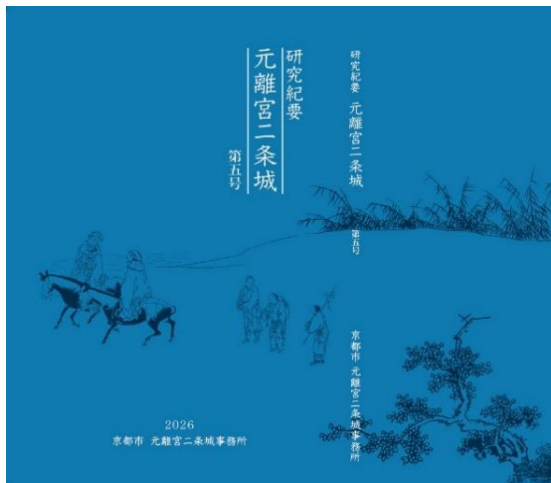
城郭施設を所有する市町村（大阪市、金沢市等）の所管課

その他関係機関

※順次配架し、4月14日（火）に元離宮二条城のホームページでも公開します。

(https://nijo-jocastle.city.kyoto.lg.jp/introduction/research/research_study/)

【表紙】



【口絵】 宮内庁宮内公文書館蔵「二条離宮大広間御襖其他張付絵画縮写図（下）」（部分）



<お問合せ先>

京都市文化市民局元離宮二条城事務所

電話：075-841-0096

FAX：075-802-6181